Latvija
日本ラトビア音楽協会ニュース
第9号
（2007年10月10日発行）

日本ラトビア音楽協会事務局
〒229-0014 神奈川県相模原市若松1-14-10 遠藤税理士事務所内
Tel 042-745-3334 Fax 042-740-4725
E-mail 0424668801@jcom.home.ne.jp

発行代表者 加藤晴生
〒277-0823 千葉県柏市布施新町2-18-9 Fax 04-7132-5423
E-mail katohr@earth.ocn.ne.jp

編集代表者 徳田浩
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田3-31-6-504 柔道新聞編集室
Tel・Fax 03-3203-0363
E-mail htoku@pastel.ocn.ne.jp

『5周年へ向け全員で盛り上げましょう』
日本ラトビア音楽協会・創立3周年記念祝賀会

2004年9月に誕生した日本ラトビア音楽協会は今秋3周年を迎え、9月17日午後、新宿三井クラブで創立3周年祝賀会を開いた。ヴァイヴァルス駐日大使（当協会名誉会員）、大塚清一郎前駐ラトビア大使ら約60名が出席、後半は会員音楽家によるピアノ・歌の演奏が次々に披露されて、実りあるひとときを過ごした。

冒頭、**藤井威会長**が「この3年間順調な歩みを続けられたのは、熊谷直博前会長が天国から見守ってくださったお陰。感謝の黙祷を捧げたい」と提案し、全員、敬虔な気持で冥福を祈った。続いて「今日はようこそお出でくださいました。大使の着任以来、ラトビアとの友好は急速に深まりつつある。3年前、60日人でスタートした当協会は165名に増え、この間指揮者交流プロジェクトの成功をはじめ、音楽を通じた交流で大きな成果を上げながらここまできたことを、皆様と喜びを分かち合いたい。当面の会員数目標は300名。加藤専務理事が外務大臣から表彰を受け、我々の活動がラトビア国家から認められたことは、誠に喜ばしい。次は5周年に向けて全員で盛り上げていきましょう」と挨拶した。

9月17日　新宿三井クラブ

この日は関口教和運営委員が司会を務め次の方々がスピーチした。

岡村喬生副会長（乾杯挨拶）「日本とラトビアの音楽友好のために5周年事業に全力投球したい。共に世界有数の合唱好きな人たちの国。当協会の益々発展を祈念して乾杯！」。

ヴァイヴァルス大使「お招きいただいたことを感謝します。私はまだ着任1年ですが、音楽協会が3周年とは信じられない（もっと長く続いているような充実した活動）。藤井会長以下皆さんの努力で多くのプロジェクトを成功させていることに敬意を表します。今年は天皇皇后両陛下がラトビアを訪問されるなど大きなイベントがあました。ラトビアにとって最も大きな海外からの歴史的訪問で大塚大使らのご尽力に感謝したい。私どもは音楽協会に、音楽の面に限らず数々のビジネスミーティングをフォローして頂いた。北九州の山本さんには陸上競技選手がお世話になり、福島の板垣さんには当地のフェスティバルに招かれ多くの方とお目にかかれた。川島さんはボーイスカウトでトップレベルの勲章返還に尽力されメディアにも大きく取り上げられた。ラトビア語教室は大人気で協会と大使館の良い関係はますます深まってとても嬉しい。今後は音楽協会が音楽の分野に止まらず、日本ラトビア友好協会に発展させて、多くの分野で末長く積極的に活動されるよう期待したい。これはラトビアにとってとても大切なことです」。

挨拶する
ヴァイヴァルス大使

（次ページへ続く）

3周年は経過点、我々の前途は広く開かれている

会長　藤井 威

2004年9月、60数名の発起人会が開かれ、日本ラトヴィア音楽協会が発足した。その中心的役割を果したのが、早稲田大学グリークラブのOB達が組織する稲門グリークラブのメンバーであったが、直接のきっかけとなったのは、1998年7月、ラトヴィアの首都リガで開かれた5年に1度の国民的祭典「ラトヴィア歌と踊りの祭典」への同クラブの参加であった。日本ラトヴィア音楽協会設立に際して、初代会長は、同クラブ・ラトヴィア派遣団の名誉団長であった熊谷直博元ラトヴィア大使、そしてこの協会を実質的に代表する専務理事には、同クラブ有力メンバー・加藤晴生氏が就任した。副会長にはオペラ歌手・岡村喬生氏と私・藤井が就任した。

あれからもう3年、「音楽を中心とする文化交流を通じて日・ラ両国の友好関係促進を」という協会の活動は、多くの成果を生んできた。その背景としては、この間に日・ラ両国の関係に多くの注目すべきイベントが相次いだことが挙げられる。主なものとして、

①駐日ラトヴィア大使館の設立と、ヴァイヴァルス現駐日大使着任（06年4月）
②カルヴィヴィス・ラトヴィア首相の訪日（06年4月）
③パブリクス・ラトヴィア外務大臣の訪日（07年6月）

が挙げられよう。

悲しい出来事もあった。06年1月、熊谷初代会長が急死されたのである。私が後を継いで2年近くなるが、故熊谷会長はこの協会の現在までの発展と現状をどう見ておられるだろうか。私達一同、心から御冥福をお祈りすると共に、私達の活動を引き続き見守ってほしい……そう思うのである。

この3年間、協会は多くの事業を手がけてきた。まず特筆すべきは、両国の指揮者交流プロジェクトである。06年11月にはラトヴィアからアイラ・ビルジーニ女史を招聘し、NHK東京児童合唱団を指揮して、ラトヴィア民謡ダイナス合唱の魅力と素晴らしい響きで多くの人々に深い感銘を与えた。我が国からは06年1月、松原千振氏をラトヴィアに派遣し、リーガ・カデドラル少女合唱団を指揮して日本の歌の魅力をラトヴィアの地に響かせた。この事業には国際交流基金の支援を得た。

音楽の国として世界に知られるラトヴィアからは、多くの音楽家たちがこの国を訪問し、コンサートを通じて日・ラ両国の相互理解と友好に貢献してきた。我が協会はこれらの数多くのイベントを後援してきた。主なものとして次のようなイベントがある。

①コンサート“現代ラトヴィア音楽のタベ（05年9月）
②バイバ・スクリデ　バイオリン・リサイタル（06年9月）
③ソルヴェイガ・サルガ　ピアノ・リサイタル（06年10月）
④少女合唱団「レソノ」来日公演（07年4月）
⑤ラウマ・スクリデ　ピアノ・リサイタル（07年7月）

（この他、ラトヴィア音楽関連の邦人演奏会を数多く後援した）

また、06年9月には名和由里さんの企画によるドラマ・リーディング「溺れる花嫁」が上演されたことも特筆されよう。第二次世界大戦下、スターリン・ソ連とヒトラー・ナチス両軍の進攻に翻弄されるラトヴィア一家の舌語に絶する苦難と悲劇を描き、その50年後の同じ家族の次世代の苦悩を、時間を超えて同時進行させる。このオーストラリア劇は鵜山仁監督の下で紺野美沙子ら4人の俳優の名演技で見る人を魅了したのである。これ以外にも私達協会は支援を惜しまなかった。

ここで強調しておくべきことは、3年経った今、我々は単に経過点に立っているに過ぎないことである。

指揮者交流は今秋3度目が決まっているし、08年に予定されている「歌と踊りの祭典」に協会として参加するイベントが控えている。09年には創立5周年を記念する「ラトヴィア音楽祭」の企画が始動した。

音楽交流を更に活発にし、またこれを通じて日・ラ文化交流、日・ラ親善の推進に、我が協会の前途は広く開かれているのである。

3周年記念祝賀会

（前ページから続く）

大塚清一郎前駐ラトビア大使「7月に帰ってきた。今年は天皇皇后のご訪問で日本とラトビアの間に新しい時代の風が吹いている。私自身もシンギングアンバサダーと呼ばれるほど音楽好き。大使と一緒にラトビアのダイナを歌いたい」。

※大使、大使館員が壇上に上がり、即席で「風よそよげ」を見事に斉唱した。

板垣直忠氏（福島県芸術文化団体連合会副会長）「最初皆さんにお会いした時“グリーの方ですか？”と聞かれた。全く無関係の福島に住む人間ですが、入会させて頂いたお陰で色々の人たちと親交を深め、素晴らしい音楽体験をさせていただいた。今年は合唱団を連れてラトビアまで行ってきたし、夏には大使に伊達市にお出でいただいた。音楽協会に深く感謝している」。

松原千振常務理事（東京混声合唱団常任指揮者）「これまで4度ラトビアで演奏する機会があり、今年は同国を代表する実力派プロ合唱団・ラトビア放送合唱団を客演指揮し、日本人の作品を演奏してきた。これからも日本でラトビアの歌、ラトビアで日本の歌が歌われるよう一層交流に務めたい。岩城宏之さんが外国のオーケストラを始めて客演指揮されたのはラトビアのオーケトラで、この時クレーメルがそこでバイオリンを弾いていた。岩城さんが生きておられたら真っ先に当協会に入会されたと思う」。

川島泰彦氏（日本ボーイスカウト富士地区国際委員長）

「不思議な縁で30余年間私の手元にあった故ラトビア人スカウターのウルフ章を、この夏ラトビアに返還してきた。素晴らしいラトビア人たちと友好を深めることができた（詳しくは8ページ参照）」。

◇

宴半ばに岡村副会長が新入会員、**エドアルド・オクーン氏**と奥さんの**萩原淑子さん**を紹介。夫妻ともバイオリニストで、オクーン氏はラトビア人。在日ラトビア人音楽家第1号会員となった。5人によるオクーン弦楽アンサンブルを主宰し、演奏の拠点はザルツブルグだが、日本でも演奏の合間にバイオリンスクール「アマデ」で後進の指導に当たる。次回は息の合ったデュオ演奏を聴かせてもらえるかも知れない。

ラトビア語教室生徒の**小川翠会員**がラトビア語で自己紹介し、拍手を浴びた。会場には草月流師範・石川弥貴（光翠）会員による生け花が飾られ趣を添えた。

◇

山本徳行氏（北九州在住・スエーデン名誉領事）＝中締め＝「今年は私自身もツイている。大使を九州に招いたり、私の故郷・三次市がラトビア陸上チームを全面的に受け入れてくれたり、私が世話をした日本語研修の留学生が、ラトビアを訪問された天皇皇后両陛下に挨拶したり…。ボランティアで続けているラトビア支援と草の根国際交流に尽力したい」。

演奏の部

風呂本佳苗さん（ピアノ）

ドビッシー曲「ゴリウォークのケーク・ウォーク」

「これまではイギリス中心に活動していましたが、今年から半分は日本で演奏活動する予定です。よろしくお願いします」。

※風呂本さんはご両親も熱心な当協会会員。

エカテリーナさん（ヴォーカル）

「貴方のお陰で強くなりました」（イギリス曲）

「涙そうそう」（沖縄曲）

※ロシア語、英語、日本語で演奏。

※ロシア連邦チタ州出身。チタ市音楽院でピアノ、歌、コーラス指揮を勉強し、さまざまなコンテストで多くの賞を受けた。1995年念願の初来日、ライブハウスを中心に全国各地で精力的に活動を続ける。日本を中心に演奏活動を続ける。レパートリーはジャンルに捕らわれず幅広い。最近はＪポップ、歌謡曲、抒情歌など日本語の歌にも挑戦し、一部歌詞を本人自身がロシア語に訳して歌うなど新しい世界も開拓している。NHKみんなのうたで『古いお城のものがたり』は好評を博した。「みなさん今日は、初めまして。私は日本と方とたくさんお友だちになりたいです」。

久元祐子さん（ピアノ）＝当会理事

ヴィートールス曲（ラトビア作曲家）

「ラトビア民族の歌」

※当協会お馴染みの顔。7月に東京文化会館などでリサイタルを開いた。

「ヴィートールスの生涯は幸せなものではなかったが、ラトビア音楽の発展に果たした大きな貢献とその作品のいのちは、音楽史に永遠に残ると確信している”」。

小田陽子さん（ヴォーカル）

ライモンズ・パウルス曲「マーラが与えた人生」（100万本のバラ原曲）

「初めまして。歌い続けた100万本のバラのルーツがラトビアであることを知り、取材を兼ねてラトビアに旅行し、パウルスさんとお会いして激励を受ける機会も得ました。ヴァイヴァルス大使、現地の黒澤歩さん、北海道東川町の西原義弘さんらにお世話になり、今回日本ラトビア音楽協会とご縁ができたことを感謝しています」。

西脇久夫さん（ヴォーカル＝ボニージャックス）＝当協会理事

西脇久夫曲「あなたの笑顔」

「サービス精神旺盛な理事。衰えない美声で、毎回素晴らしい歌を披露してくれる。今回は自分の事務所のエカテリーナさんを同伴して花を添え紹介役も務めた。

3周年祝賀会グラフティ

大塚駐ラ前大使がラトビア大使館員と「風よそよげ」斉唱

岡村副会長が、新会員在日ラトビア人音楽家オクーン夫妻を紹介

演奏幕開けは風呂本佳苗さんのピアノ

続いてエカテリーナさんが登場し確かな日本語で熱唱

久元祐子理事が挨拶のあとヴィートールズの作品を演奏　左側の生け花は石川光翠さん制作

新会員の小田陽子さんが「マーラが与えた人生」を披露

小川翠さんがラトビア語教室の成果を披露　中央は通訳役のターヤ・カリブレナさん、左は司会の関口運営委員

談笑する九州の山本さんと福島の板垣さん

演奏のトリはボニージャックスの西脇理事が自作「あなたの笑顔」を演奏

美女歌手に囲まれて幸せそうな藤井会長

出席者（順不同・敬称略）

ヴァイヴァルス大使ほか大使館員5名、大塚清一郎前駐ラトビア大使、藤井威、藤井明子、加藤晴生、遠藤守正、松原千振、西脇久夫、エカテリーナ、久元祐子、田中享、迫秀一郎、山本徳行、ターヤ・カリブリナ（山本氏同伴）、板垣忠直、坂田知子、頴原信二郎、石渡迪康、小俣泰英、小山田安宏、石原祥弘、熊谷敬子、石川晴彦、八木昌子、桜井珊子、中嶋勝彦、風呂本佳苗、小田陽子、芦辺拓、エドアルド・オクーン、萩原淑子、川島泰彦、関口教和、金岡隆、石川了、石川弥貴、清水光子、満田武敏、小川翠、ジャネッタ・スードニッツェ（他に同伴1名）、NHK児童合唱団2名、早稲田大学グリークラブ志波昭宏他4名、徳田浩（以上55名）

理事会報告

5周年記念演奏会開催へ始動

07／9／17　11:00〜12:00
新宿三井クラブ
出席者　藤井会長、岡村副会長、加藤専務理事、遠藤・松原・徳田各常務理事、頴原・迫・久元各理事、山本顧問、関口運営委員
加藤晴生専務理事から
①設立以来の会員数及収入の推移
②2007年度主要活動
③今後の展開
に関して報告と抱負が述べられた。
○…04年9月14日設立時の63名から、現在の会員数は165名になった。会費収入の他、寄付金、大鵬薬品・名刺広告などのLatvija広告収入、国際交流基金が主要収入。寄付金は創立時の発起人によるものの他に、07年は大口寄付が3件あった。国際交流基金は05年、07年の指揮者派遣事業で受給した。
○…今年度は天皇皇后両陛下ご訪問、外務大臣の来日、名誉領事任命（沖縄・翁長氏）などが続き、両国が一段と友好を深めた。当協会も広報面で積極的にフォローした。特筆すべき事業はラトビア語教室開設で、ラトビア国内でも大きく報道された。継続事業の指揮者交流プロジェクトは今年が3度目で、10月下旬に山本健二会員を派遣する。その他、数々のラトビア音楽関連コンサートを後援・支援した。
○…08年7月の「歌と踊りの祭典」見学ツアーは現時点で約40名＋α（早稲田グリー関係）が参加の意向。グランドフィーナレは7月12日で、10日にリガ入りする予定だが、前後の訪問地などはこれから詰める。ウィーン、ストックホルムなどが候補。
○…5周年記念事業は東京でラトビア音楽祭を開催することで意見が一致した。会場（動員規模）、演奏曲、演奏者に関していろいろ意見が出た。早急に実行委員会を立ち上げ、引き続き論議を重ねて方向付けを行う。なるべく早く結論を出す。特に会場を早く決める。地方開催も検討材料。大方の意向は、オペラシティ規模の会場で、ラトビア人作曲家によるパイプオルガン（オーケストラでなく）、独唱、合唱の作品。一例としガルータのカンタータ「神よ！あなたの大地は燃えている」や、ヴァスクスの「我々に平和を与え給え」などが上がった。併せて当協会の全国展開、スタッフ強化、新たなスポンサー開拓、対ラトビア広報活動を推進する。会員数300名を目指す。懸案のラトビア女声合唱曲集刊行は日本の出版社とも交渉を継続している。

ラトヴィア放送合唱団と共に

松原千振
（東京混声合唱団常任指揮者・当会常務理事）

2007年最初のコンサートはラトヴィアのリーガだった。この国を代表するプロ合唱団であるラトヴィア放送合唱団は、1940年創設という。とても大変な時代に活動が始まったものだ。それを考えただけでも、この団体の偉大な存在を思う。そして現在のラトヴィア合唱にも不可欠な団体となっている。

私自身の客演指揮活動は、となりのエストニアに始まった。1987年のことである。その後、リトアニア、ラトヴィアと、バルト諸国には、日本、フィンランド等の団体と共に何回も訪問させて頂いている。旧ソ連時代、ヴィザを取得し、不馴れな旅行を強いられたことを思うと隔世の感がある。聞くところによると、岩城宏之さんも正式な意味での客演はラトヴィアだったとのこと、1960年代初頭だった。その時指揮したオーケストラに、あのギドン・クレーメルがいたと、彼は話してくれた。

さて、ラトヴィア放送合唱団は1パート6人、総勢24人で、ヨーロッパのプロ合唱団としては標準的な団体である。いつもそうだが、初めての練習はぞくぞくするものだが、この合唱団も同様、日本の合唱曲に対し、いつも指揮している団体とはかなり異なった反応をした。特に間宮芳生「コンポジションⅠ」では、その深い音とフレーズの長さに驚いた。ただ、日本の楽器を模倣する細やかなリズムの練習に多少時間を要した。しかし、合唱団の特質が少しづつわかり、また団員も音楽の質を理解し始めると、仕上がりへの過程は

順調だった。

今回のプログラムは、教会でのコンサートでもあり、細川俊夫「Ave Maria」を1パート1人（16声）でまず演奏した。ニュージーランドのJock Bodyの宗教音楽、その後間宮芳生、池辺晋一郎の音楽を選んだ。日本の合唱曲は現在、かなりの国々で演奏されてきている。特に間宮芳生の描く音楽は日本の音を思わせる特徴的な音楽であり、単に伝統音楽の編曲にとどまらず、かけ声、はやしことばをも含め、独自の日本音楽としての進展を示している。従って、外国における客演の際、最も重要視すべき音楽と私は考えている。池辺晋一郎「東洋民謡集」は、東洋に存在する単純なメロディーから実に豊かな人間あふれる音楽に発展してゆく。特に今回、ラトヴィア放送合唱団と共に演奏した台湾の「豊年祭」はコンサートの最後の曲でもあり、ヴォリュームあるテノールのfffに、教会の音楽が加わり、愉快な演奏となった。

ラトヴィア放送合唱団は実に忙しい合唱団である。自国内における演奏と共に、ヨーロッパ各地への旅行、又、有数のプロ合唱団との連携も強め、それらの団体との合同演奏会等、近い将来、来日公演も企画したいと思っている。

2万人が大使を歓迎 伊達市がラトビア大使を招待

坂田知子
やながわ女声コーラス副会長・当会会員

福島県伊達市は、市内梁川の合唱団「やながわ女声コーラス」のラトビア訪問のお礼も兼ねて、駐日ラトビア大使ペーテリス・ヴァイヴァルス氏を、伊達市梁川の夏祭りに招待しました。大使とオレグス秘書官は8月14日午前、東北新幹線で福島駅に降り立ち、板垣忠直会員と私（坂田知子会員）が出迎え、伊達市の車で約20キロ北にある伊達市役所に向かい、仁志田昇司伊達市長、教育長、企画部長等と約1時間程会談の後、夏祭りを開催する梁川に向かいました。

伊達市梁川は人口2万2千ほどの旧梁川町。ふるさと夏祭りは、町の中央を流れる広瀬川の畔にある「親水公園」を中心に開催され、踊り流し、灯籠流し、「火振り山の火祭り」よさこい、花火大会など、多彩な行事が繰り広げられますが、メインの行事は、梁川の過去・現在・未来を音楽で綴った、オラトリオ「水のほほえみ」です。梁川交響吹奏楽団80人、やながわ女声コーラス、コールアンポ、混声合唱団ひろせ、梁川ロータリークラブ合唱団、伊達市役所梁川支部男声合唱団など約150人の合唱と、30人の踊りの会、20人の和太鼓かたりべ、2人のソリスト、で構成する音楽物語で、周囲には、梁川市出身の名士「東京梁川会」の皆さん、会場には、客席、橋、対岸の堤防などに、2万人以上の観客が押し掛けました。演奏に先立ち、仁志田市長から大使が紹介され、4月にラトビアを訪問したやながわ女声コーラスのメンバーが、大使のため

仁志田市長と握手する大使
左端はオレグスさん、次が板垣さん

にラトビア民謡「風よそよげ」を歌い、演奏に入りました。

指揮は、この音楽の作曲者で、やながわ女声コーラス、梁川交響吹奏楽団の音楽監督、板垣忠直会員です。

演奏は30分ほどで終りましたが、大使はその後の花火大会も堪能、9時過ぎに会場を出発して福島市のホテルに戻りました。ちなみに、この日の夕食は、広瀬川で捕れたニジマスの串焼き、焼きそば、玉こんにゃく、生ビールなどの田舎祭の屋台料理、日本の夏祭りを充分味わわれたことでしょう。

翌15日は旧盆で、9時30分に、板垣会員、田口やながわ女声コーラス会長と私（ラトビア訪問団事務局）の案内で、伊達市の果実農業で桃狩りを楽しみました。伊達市は日本の桃の北限、築100年の農家の座敷には、地方特有の盆飾りがかざられ、旧家の軒先には、ツバメの巣に雛が並び、親が餌を運ぶ様子が見られました。又、訪問先の果樹農家斎藤さんは、この日が83歳の誕生日とあって、大使からお祝いを受け、感激しておりました。

ラトビアという国の存在をほとんど意識することになかった伊達市民にとっても新しい世界観を得ることのできた、意義深い出来事でした。

幻のアーリア人起源説
ラトビア人とはなにか

田中　享
（前在ラトビア日本国大使館臨時代理）

いずれの太古の時であろうか。霧深く千古斧の入らぬ巨木が生い茂るバルトの沼沢地に、ラトビア人の始祖が移住してきたことがあった。そして突然眼前に果てしなく広がるバルト海がダウガヴァの大河と交差する地点に至り、しばしその歩みを止めたに違いない。このようなラトビアに最初に住みついた人々はどんな民族だったのだろうか。この疑問をとくため、ラトビア大学において民俗学の第一人者とされる教授に教えを乞うた。

教授は私の目的を聞くと静かに言った。「私はこのテーマについて一生を捧げてきました。このようなラトビアの本質的な問いについて外国の人から質問を受けたことは初めてです。ついては卒直にお答えしましょう」。教授は質素な服装をした初老の人で、学問だけに徹して生きてきた人のような雰囲気を漂わせていた。

「私はラトビア人はアーリア人の子孫だと信じています。その証拠は言語と自然信仰です。違う説があることも承知しています。しかしながら、この地域の文化を調べれば調べるほど古代アーリア人の自然観や信仰、慣習、伝統がヨーロッパの中で最もよく残されていることが判るのです」。

私は驚愕した。アーリア人とは全てのヨーロッパ言語を話す諸民族の始祖といわれながら、その起源さえ謎となっている民族ではないか。さらにアーリア人という言葉は、かってヒットラーがアーリア人支配民族説を喧伝し、未曽有の人種差別政策とユダヤ人迫害を引き起こしたため、その後欧米社会では文字通り禁句となったのではなかったか。

ではそもそも古代アーリア人とは何か。筆者は言語学や民俗学の専門家ではないが文献を見てみよう。やや古典的な通説では、古代アーリア人は推定紀元3千年前後、コーカサス地方を発祥の地とする戦闘的な騎馬民族であり、たちまちのうちに東西南北近隣すべてを征服し、さらに長駆イラン、インドまで征服したとされている。その言語は現在のインド・ヨーロッパ諸民族の祖語となったといわれる。その民族の起源がコーカサス山脈のふもとにあったと信じられたため、その後西欧人は「コーカシアン」と呼ばれるようになったという。そもそもアーリアとは、サンスクリット語で「高貴」という意味で、一時期インド・ヨーロッパ語といわれる全言語体系のことを意味した。またより狭い意味では、イラン人とインド人が自らのことを自称したといわれる。イランという言葉も、「アーリア人の土地」という語とされる。

古代アーリア人の発祥の地はどこなのだろうか。これにはインド説、アナトリア高原説、中央ヨーロッパ説、コーカシア説と諸説あり確定していない。

インド起源であればヨーロッパへ西漸したこととなるし、ヨーロッパが発祥の地であればインドへ東漸したこととなる。発祥した時期についても3千年前から5千年前と文献により異なる。このようにこの失われた古代アーリア人については考古学上の決定的な証拠がないため、未だ神秘のヴェールに包まれたままとなっている。

英国のゴードン・チャイルド博士によれば、古代アーリア人は馬とチャリオット（馬で引いた軽戦車）を使用した騎馬民族であり、その証拠として馬、車輪、車軸、くびきという語彙が多いという。このため騎馬民族としての移動性、卓越した戦闘力を誇ったことが特徴という。その起源はアジアのアナトリアなどから発生しヨーロッパに征服民族として侵入したのではないかと推測している。そして騎馬民族であったため考古学的遺物が残らなかったのであろうという。とくにギリシャ民族についてはその言語がインド・ヨーロッパ語であることと紀元前1500年頃にはチャリオットがあったことから古代アーリア人が侵入したのではないかとう説もあるという（「ヨーロッパの伝統」オックスフォード出版）。

きっかけは18世紀末、インドに在勤した英国人がインド語とヨーロッパ言語が語彙、文法が酷似していることを発見したことにある。この結果かって存在したはずのインド・ヨーロッパ語の祖語があるはずだということとなり、学者による大研究が始まった。そしてこの祖語を話していた古代インド・ヨーロッパ語族をアーリア人種とよぶようになったと言われる。

ラトビア大学の教授は続けていう。「古代アーリア人の宗教は自然信仰でした。信仰の中心には恵みをもたらす太陽が男性原理として君臨しています。夏至祭はこれに関係しています。このほか大地は豊穣をしめす女性原理として多数の女神を生み出しました。アーリア人は小川のせせらぎや風の音にも神を感じたのです。その結果私が調べただけでも840余の神々がいます。その中にはマーラなど多くの女性神がいます」。さらに教授は自分の著書を開いて、古代神が蛇や牝牛を神の使いとして大切にしたこと、古代アーリア人から伝えられてきたさまざまな文様があることを教えてくれた。ナチスが使った鉤十字スワステカの紋章は、本来は古代アーリア人の幸福のシンボルだったという。

英国の著名な人類学者ジェイムズ・フレイザー博士はその著「金枝篇」でラトビア人教授の説を裏付けるごとく次のように言う。「アーリア人の原始宗教は、ヨーロッパの農民の信仰と慣習の中に絶滅せず残っている。ヨーロッパの農民が春、夏至、収獲時に行う儀式は、本来植物と家畜を増殖させるために古代アーリア人が行った原始宗教である。5月祭は同じく植物生育の精霊を祈念するものであった。この時期に男女が森に入ることは、豊穣のための神婚であり神聖な行為とされた。またヨーロッパのアーリア人の宗教史上、樹木崇拝は重要な役割をはたした。グリムはチュートン語の神殿という言葉から、ゲルマン民族の最古の聖所は自然の森林であったと説明している」（「金枝篇」岩波文庫）。これはラトビア大学の教授の主張と同じであり、また現在ラトビアだけでなく広く北ヨーロッパで多くみられる風習とその意義を説明して、余すところがない。

1201年、ドイツ人が現在のラトビアの地に到来し征服すると、現在のラトビアの地はドイツ文化の下に置かれるようになった。宗教はカトリックに改宗することを強制され、それまでの自然信仰は異端とされ禁じられたと思われる。公式な言語はドイツ語となったといわれる。同時に当時のラトビア人は、小作や農奴としてドイツ人が支配する荘園経済の中にしっかりと組み込まれ、その生活は農村生活の中に封印されてしまった。このため、かえってその言語と宗教は農村の生活の中で受け継がれることとなったといわれる。他のバルト諸国も事情はほぼ同じであろう。

ラトビア人が幻のアーリア人の子孫であるか否かについては議論があろう。しかしながら民族のアイデンティティーという観点からは、その民族自体がどのように信じているかということのほうが大切かも知れない。人生では時に忘れえぬ人との出会いがある。私はこの教授が心を開いて、ラトビア人はスラブ民族でもゲルマン民族でもなくそれよりも古いアーリア人の子孫であると信じていること、そしてそれをひそかに民族的なアイデンティティーとしてきたことを教えてくれたことを感謝している。ラトビアを含むバルトという地域は、ヨーロッパにおける歴史と文明の十字路にあった。このためつねに強大な四囲の民族に征服され、その文化は蹂躙されてきた。この結果現在ラトビアは独立したが、いまだに民族の心や文化を回復しきれず苦しんでいるところがある。パブリクス外相が、ラトビアの歴史を回復しようと国民に呼びかけている所以であろう。いずれにせよ何かラトビアが私達を惹きつけてやまない不思議な魅力をもつのは、このようなヨーロッパ文明の基層にある自然な伝統や慣習が数多く残されているためかも知れない。

ラトビアの作家ライマ・エグリデ、日本初個展開催

11月3日～12月3日
ギャラリー・ストレンガー
（港区麻布十番2–12–4
電話03–5443–8894）

ライマ・エグリデは1945年リガ生まれの女性画家。現代絵画の他、アニメや絵本など多岐にわたる制作活動を続け、ラトビアのみならず欧州・アメリカでも高い評価を受けている。現在もドラマのプルデュサーであり、キャンパスは彼女の「シアター。「人生には愛を、アートには内なる思いを」。作品を通して語られる彼女の言葉に耳を傾けてください。※ヴァイヴァルス大使も彼女をよくご存知で日本初個展を非常に喜び、「大使館もフルサポートします。成功を祈ります」とメッセージを寄せた。お問合せは080–3095–7042（やのまき）へ。

日本の合唱界の現状

黒澤幸男
くらしき作陽大学音楽学部教授・当協会常務理事

日本の合唱界はアマチュアが主体

ヨーロッパの音楽界においては、教会音楽に始まる合唱音楽の伝統があり、各国各様の発展が見られる。現在は特に北ヨーロッパ、バルト三国、チェコ・ハンガリーなどの東ヨーロッパなどが盛んなようだ。日本もアジア諸国の中では特に盛んで、全日本合唱連盟に加盟している団体は4000以上に及び、加盟していない団体を合わせれば5000以上になるのではないか。その殆んどはアマチュアで、これらの団体の態様は、小・中・高校の各学校をはじめ、大学、職場、一般市民で、それぞれ活発に活動している。

学校の合唱団は通常の学校内の演奏活動のほか、全国的なコンクールへの参加、自分たちが主催するコンサートを行っている。小学校では同声3部合唱、中学校では同声3部や混声3部、高等学校では女声3部、男声4部、混声4部と内容が多様化して行く。中でも女声合唱は全体の5割近くを占め、新しい合唱曲の創作もこの形が中心になっている。大学での合唱活動は、1950年代後半から65年ころまでは男声合唱が高いレベルを維持して日本の合唱界をリードしてきたが、その後は男声合唱が衰退し、混声合唱が主体となっている。

第二次大戦後は職場における文化活動として合唱が奨励され、優秀な指導者を招いて活発な活動が続けられ、小編成のものから100人を越す大合唱団もあり、現在もその勢いを保っている。一般市民の合唱活動は、小・中学校の父母による合唱グループから発展したおかあさんコーラスが主体で、この他には大学のOB・OGによるグループがあるが、80年代から一般人が「第九交響曲」を歌うことが流行し、これによってコーラスの魅力を知った人たちが合唱団を結成するなど、底辺が広がっている。また近年は限られたメンバーながら著名な合唱指揮者のもとで高いレベルの演奏を行いたいという団体も現れ、多様化してきた。

合唱付きのオーケストラ曲の演奏では、外国では放送合唱団や歌劇場の合唱団が歌うことが多いが、日本ではアマチュア合唱団のレベルが高いので、故関屋晋氏の指導した晋友会や栗山文昭氏率いる栗友会などが担当することが多く、その安定した実力は外国の名指揮者からも激賞されるほどである。

日本の現代音楽創造に果たした合唱の役割

現代曲の創作においては、オーケストラ曲などは放送局やオーケストラの委嘱、室内楽や器楽曲は演奏家からのリクエストによるものが多いが、合唱曲は合唱団や出版社からの委嘱が殆んどで、作曲の機会も多く、日本の作曲家たちの創作活動を支えている。

1950年代から70年代にかけては、毎年秋に開催される芸術祭に参加するため、放送局やレコード会社が競って作曲家に新曲の作曲を委嘱し、多くの名曲を生み出している。高田三郎の「水のいのち」はTBSの委嘱で作曲され、今では合唱を愛する人のほとんどが歌ったことがあるほど親しまれ、他の作曲家も多くの名曲を残している。

80年代以降は社会情勢・経済情勢の変化で、放送局やレコード会社がこうした作曲委嘱が行いにくくなり、代わって一般の合唱団が新しいレパートリーを生み出そうと、作曲家に委嘱することが盛んになり、多くの作品の誕生につながった。中には高等学校やおかあさんコーラスの団体が委嘱するケースさえあり、日本の作曲界に大きな刺激を与えている。

三善晃、間宮芳生、林光、三木稔、広瀬量平、池辺晋一郎、青島広志、新実徳英、西村朗など、日本の作曲界の中心として活躍している作曲家たちも、若き時代に合唱曲を作ることによって経済的にも援助され、勉強の場を与えられて成長していった。それに続く木下牧子、高嶋みどり、松下耕、信長貴富などの世代も合唱曲の創作に意欲を燃やしている。

日本の合唱界の発展に寄与した全日本合唱連盟と日本合唱指揮者協会

こうした合唱界の発展を支えたのは、全国的な組織として合唱団を指導してきた全日本合唱連盟と、合唱音楽を愛して各地で合唱団を指導してきた合唱指揮者の集まり、日本合唱指揮者協会に所属する合唱専門の指揮者の存在である。

「全日本合唱連盟」は全国各地で活躍するアマチュア合唱団を統括する団体だが、合唱セミナーやコンクールを主催して、合唱界のレベルアップに尽力し、日本を世界有数の合唱大国に押し上げた。毎年秋に開催される全日本合唱コンクールには、各地区の予選を勝ち抜いたトップクラスの団体が出場して技を競うが、このコンクールにゲスト審査員として招かれる外国の合唱指揮者は、そのレベルの高さに絶賛を惜しまない。

これらの合唱団を指導している合唱指揮者の活動はもっと評価されるべきだが、日本では何故か合唱指揮者の社会的地位が認められていないのは残念だ。彼らの地味な活動が日本の音楽界を支えていることはもっと認められていい。その活動の一つはレパートリーの拡大で、指揮者協会が企画した一連のコンサート・シリーズ「知られざる名曲を尋ねて」は、世界中で歌われている合唱曲を集めて、自分たちが指導する合唱団を使って演奏して、他の合唱団に紹介するもので、グレゴリオ聖歌から現代曲にいたるまで、膨大な作品を日本に紹介した。これまで主として西ヨーロッパ諸国の作品が多く演奏されていたが、これまであまり知られなかったチェコ、ハンガリー、ポーランドなど東ヨーロッパ諸国の作品が多く紹介され、その後日本の合唱団のレパートリーとして定着したのは、この協会の業績といえよう。

レパートリー拡大に貢献した松原千振氏

また、これにはフィンランドなどで勉強してきた指揮者の松原千振氏の果たした役割を忘れてはならない。松原氏は北欧留学からの帰国後、東京混声合唱団の指揮者として、多くの演奏会でフィンランド、スェーデンやバルト諸国の作品を積極的に取り上げ、その結果多くの合唱団が演奏するようになった。

この他にも合唱指揮者グループ「合唱樹」の功績も見逃せない。同人の栗山文昭氏、藤井宏樹氏、野本正人氏らが企画する『東京カンタート』では、毎年外国から著名な合唱指揮者を招聘して合唱の技術指導、新しいレパートリーの紹介などを行っている。

よく外国の合唱関係者に聞かれることは、民謡をテーマにした曲はないかということである。日本では民謡は邦楽的な分野のものとして、洋楽とは別のジャンルの芸能として扱われているため、少々低く見られる傾向がある。しかしヨーロッパ諸国の合唱団では、民謡は重要なレパートリーであり、日本でのコンサートでも取り上げられている。バルトークやコーダイなどが民謡を題材にした作品を多数書いているが、日本ではそうした作品はあまり高く評価されていない。しかし間宮芳生、三木稔などは民謡を素材にした名曲を残しているから、この分野にもっと目を向けてよいのではないか。

輝く太陽　歌い続けた１世紀
「早稲田大学グリークラブ100年史」完成

男声合唱界の雄・早稲田大学クリークラブが今年創立100周年を迎え、懸案の100年史が完成しました。岡村喬生副会長、加藤晴生専務理事ら、当会の主要メンバーも同クラブ出身で、学生時代に躍動した青春群像がこの本の中に充満しています。執筆・編集は私（Latvija編集長・同クラブ出身）が担当しました。日本の合唱史もしっかり描いたつもりです。是非ご一読いただければ幸いです。650ページの大冊で頒価は5000円（プラス送料600円）。ご希望の方はLatvija編集室へお申し込みください。（徳田）

早稲田に音楽活動が始まったのは1903年（明治36年）。早稲田大学音楽会が設立され声楽部と器楽部が活動を開始、4年後の1097年（明治40年）、記念すべき第1回演奏会が開かれて早稲田の杜に男声合唱がこだました。早稲田大学グリークラブ（通称ワセグリ）の歴史はこの年に始まった。

集まり散じて人は変われど、部員は4年間という限られた時間の中で、一曲一曲の演奏に全力投球し、質の高い音楽を追及して次の学年へ、さらに次の学年へ引き継がれてワセグリ100年の伝統と力を築き上げた。

現在部員は100余名。常に大量部員数を維持しながら日本男声合唱界の担い手として多彩な演奏活動を続ける。戦後は海外の演奏活動も積極的に行い、“世界のワセグリ”として海外でも高い評価を得ている。

1500名に及ぶOBは、それぞれがあらゆる分野の第一線で世界を股に活躍を続ける。当会会員の白井克彦早稲田大学総長、ジャーナリストの筑紫哲也ら枚挙に暇がない。音楽の世界でも磯部俶、福原信夫（いずれも故人）をはじめ、当会会員の岡村喬生、ボニージャックス、堀俊輔ら多くの人材を輩出した。

合縁奇縁 「世界陸上2007大阪」ラトビア選手団

ラトビア支援の会　会長
山　本　徳　行（在北九州スウェーデン名誉領事）

第11回IAAF世界陸上競技選手権の日本での開催は1991年の東京大会以来16年ぶりである。今や世界陸上は、オリンピック、FIFAワールドカップと並ぶ「世界3大スポーツ・イベント」の一つとして数えられており、8月25日から開催された2007年大阪大会では、世界203の国と地域から、約2,000人の選手・役員が参加し、世界中の190の国と地域でTV放映され、延べ65億人の人々がその熱い戦いに注目した今年最大のイベントだった。

私が草の根活動としてラトビアの支援を始めて10年以上が経過したが、その活動の成果が功を奏し、日本とラトビアとの国際交流が軌道に乗ってきたのではと自負している。昨年は念願であった駐日ラトビア大使館も設立され政府間の交流も活発になったし、今年6月には天皇・皇后両陛下がラトビア共和国を公式訪問されたので、ラトビアでは日本熱が大フィーバーし、両国が遠くて近い国になった感じで大変喜ばしいことだ。

私は6月3日ラトビアのパブリスク外務大臣が訪日した際、東京の大使館で催された歓迎会に招待され出席した。外務大臣とは初対面だったが、私のラトビア支援の草の根活動を大使から説明受けた外務大臣は私の長年の支援に感謝すると共にラトビア支援活動の継続を要請された。折しも7月2日には私が招聘した短期留学生、今年度首都のリーガで開催された日本語弁論大会の優勝者（ラトビア大学の日本語学科の学生）が日本語研修のため来日した。彼はリーガの独立記念塔の前でラトビア訪問中の天皇・皇后両陛下にご挨拶し、最後に「天皇陛下万歳」を唱えた日本贔屓の好青年であった。

冒頭の「世界陸上2007大阪」とは無関連のようだが、私にとっては「合縁奇縁」で、世界陸上に参加するラトビア共和国の選手団を、私の故郷、広島県の三次（みよし）市が事前合宿受け入れをするというニュースが舞い込んで来た。三次市はこの受け入れを国際交流の好機と捉え選手団の滞在費を負担し、積極的に支援すると共に、トップレベルのアスリートと子供達や一般市民とのスポーツ交流を実施する等、地方の人口6万の市としては画期的な素晴らしい企画であった。

私は三次市・市長公室政策チームが主体となり設立された実行委員会から、ラトビア選手団受け入れに当たり協力を要請された。草の根活動として長年ラトビアと関わってきた私にとって、地元へ恩返しをする絶好の機会であり、少しでもお役に立てばとボランティアで積極的に協力することにした。

早速、三次市役所を訪れ、日本から遠く離れたバルト三国の一つラトビア共和国は市民にとって無知に等しい国のため、ラトビアの民族性、食生活・習慣等をお話し、大使館との折衝や通訳の手配等、長年の培った経験を活かしアドバイスした。一般市民に広報するため、私が所持していたラトビアに関する書籍類やDVD、駐日ラトビア大使館から取り寄せたポスターを提供した。三次市長を始め実行委員会の方々から歓迎された。

三次市は中国山地に囲まれた盆地で中国地方のほぼ中央に位置し、大阪・下関からそれぞれ約250キロ、古くから山陰と山陽を結ぶ交通の要衝として栄えた風光明媚で霧の街、鵜飼の里として知られ、広島県内でも古代の遺跡や古墳が多く、歴史遺産や文化財に恵まれた地域としても知られている。江の川水系の水郷・三次では豊かな水を利用して、古来より酒造りが盛んで、現在四つの酒蔵があり、厳選した酒米と伝統の工夫を凝らした仕込み法により、それぞれ蔵独自の味の酒を作り出している。近年、本格的なワイン工場として県内最初の三次ワイナリーが1994年（平成6年）に誕生、黒い真珠と言われる三次ピオーネをはじめ、ワイン専用種シャルドネ、メルドー等、三次産のぶどうを原料としてワインを製造し、県内外の愛飲家やワイン通に好評を博している。又、個性豊かな本格的ビール、ドイツ語で「盆地」を意味するベッケンと名付けた、他では味わえない風味豊かな地ビールBecken Beerも好評で愛飲家を喜ばしている。

みよし運動公園陸上競技場は公式競技場として日本陸連から認可され、市街地の南の緩やかな丘陵地に位置し、緑豊かな自然に囲まれた公園の中で、充実した付帯施設が整い、大都会に比べ空気も清々しく絶好の環境のキャンプ地である。先ず、ラトビアから大阪大学に留学中のリンダ・ガルワーネさんに通訳をお願いし、8月15日三次駅に到着した彼女をラトビア国旗をあしらった茜色のバラと白いカスミソウの花束を持って出迎えた。私とリンダさんとの初対面は昨年のラトビア大使館開設パーティだった記憶はあるが人柄については無知に等しかった。しかし、通訳依頼のメールや電話で信頼していた通り、彼女は大学院文学研究科に在籍し比較文学専攻の聡明で流暢の日本語を操る才女であった。宿舎のグランド・ホテルで彼女と事務局を交え入念な打ち合わせをし、夕方は受入実行委員会三田委員長をはじめ委員の主要メンバーとベッケン・ビール・レストランで私が持参したラトビアの酒、BALZAMSで乾杯し、ベッケン・ビールを飲みながら懇談した。

広島県三次市で盛大なレセプションが開かれた

三次市長ら市の幹部と記念撮影
大使らに特別名誉市民称号記授与された

選手たちは三次の郷土芸能を楽しむ

周到な選手団受け入れ準備が整い、8月17日、関西国際空港に到着したラトビア選手団の6名を出迎え貸し切りバスで、ラトビア語の歓迎幕が張られた三次のホテルに着いたのは夕方近くであった。三次への車中、リンダさんの通訳でスケジュールの調整等の打ち合わせをスムースに行い翌日からの練習に備えた。

選手団はホテルにチェック・インした後、市長、市議会議長、受入実行委員長が待つ三次市役所へ表敬訪問に伺ったが、玄関前では市役所職員の大きな拍手で暖かい出迎えを受けた。宿舎のホテルでは、食事にも特別に配慮し、ラトビア人の好むヨーグルトやフルーツなどを毎食用意して選手団を持て成した。

「がんばれ！ラトビア」の横断幕が張られた陸上競技場で、環境にも恵まれて、選手達は連日精力的にトレーニングに励んだ。選手団のトレーニングの合間を利用して8月19日には地元の子供達や一般市民とのスポーツ交流会、その後「ラトビアのアスリートの心を込めて」とラトビア語タイトルのプレートを添えて、運動公園に楓の記念植樹が行われた。

ラトビア選手団の練習も最終段階となった8月20日、財団法人三次国際交流協会主催の「激励のタベ」が100名を超える市民参加のもとで開催された。特別ゲストとして、駐日ラトビア共和国特命全権大使ペーテリス・ヴァイヴァルス閣下も参列された。駐日外国大使としては最も新しく、ラトビア共和国では若いエリート外交官の一人で積極的外交を目指している大使であり、三次市の招待に気軽に応じ、公式訪問されたことは画期的な出来事であった。

「激励のタベ」では冒頭、吉岡広小路市長からヴァイヴァルス大使並びに選手団全員に特別名誉市民称号記が授与され、大使・選手団とも大感激の面持ちであった。吉岡市長、前川国際交流協会理事長の激励の挨拶に応えて、ヴァイヴァルス大使が三次市の国際交流の素晴らしさを賞賛すると共に受入実行委員会に深謝すると答礼の挨拶を述べ、選手団には大阪大会での活躍を期待すると激励した。特に、大使は備後三次の城主浅野氏の歴史と故事に触れ、競技では勝利を目指し最後まで全力を尽くして戦い抜くよう選手団を激励し満場の喝采を博した。続いて、選手団団長が事前合宿の受け入れに対して謝意を述べ、直前にバンコックで開催されたユニバーシアード大会で3選手全員がメダルに輝いたことを紹介して「世界陸上2007大阪」大会での奮闘を誓った。アトラクションとして地元の子ども神楽同好会により、鬼面が乱舞する「塵倫」が演じられた。豪華な衣裳を着けた子供達は鬼面を手に大使や選手団と記念撮

（次ページへ続く）

合縁奇縁

（前ページから続く）

影をしたのち、激励の夕べは盛会裏に幕を閉じた。

翌8月21日ヴァイヴァルス大使と選手団は地元の中学校を訪問し、柔・剣道の練習を視察、交流会では生徒代表から選手団に激布が贈呈された。大使は寸暇を惜しんで、三次市が誇る優美で幻想的な美術館やワイン工場、マツダのテスト・コースを視察した。自然環境に恵まれ人情味溢れた市民に接し、山間の小都市、三次に深い感銘をうけて夕方、広島空港から帰京した。空港への車中、大使は「三次にラトビアができたようだった」と感激し、三次での事前合宿の成功を喜び、深甚の謝意を述べた。三次での事前合宿は天候にも恵まれ、選手たちの練習も順調に進行した。ラトビア選手団は本番に供え8月23日バスで、市長はじめ大勢の市民・関係者に見送られて三次から大阪の宿舎に向かった。この機会に、ラトビア支援の会として、三次市長、受入実行委員会、市民並びに関係者の皆様のご歓待に対し心から感謝申し上げる。通訳として大活躍したリンダさんは、連日夜遅くまで実行委員との打ち合わせも笑顔でこなし、大使や選手団だけでなく三次市民からも大歓迎をうけ、素晴らしいラトビアとラトビア人を印象づけた最大の功労者であった。

ヴァイヴァルス大使は三次市訪問に先立ち、8月6日広島の原爆記念式典に在日外交官として参列した後、北九州市長への表敬訪問や商工会議所、JETRO、貿易協会、等の幹部と懇談するため、北九州を初訪問した。その夜は私の所属する戸畑東ロータリー・クラブの有志を交え、ラトビア支援の会として、ヴァイヴァルス大使の歓迎会を門司港の奥座敷「料亭伯翠庵」で催した。名物の笹酒を飲みながら話が弾み、楽しい夜を過ごしヴァイヴァルス大使もご満悦であった。翌日、私は大使の要請で、市長表敬訪問、商工貿易団体との懇談に同行したが有意義な面談だった。国の重要文化財の西日本工業倶楽部で行われたロータリー・クラブの特別例会に大使をお招きした。昼食を共にしたあと、大使はラトビアの歴史を紹介し、人との絆を大切に日本・ラトビアとの国際交流を積極的に促進したいと約30分間卓話した。私の案内で大使は重要文化財の和・洋式家屋を興味深く見学したり、日本最大の衛生陶器機メーカーTOTOの工場を参観して、8月7日夕方北九州空港から帰京した。北九州に滞在中、初訪問の大使を私は真の国際交流を念頭に誠意を尽くして歓待した。

私は盆休みを返上して事前準備から選手団のキャンプ期間を通して、可能な限り受入実行委員会のお手伝いをし、ラトビアのアスリート達を持て成した。お陰さまで、私の信念である「人脈、出会いが大切」に適った「合縁奇縁」で、微力ではあるが故郷のお役に立ち、地元の関係者、駐日ラトビア大使、選手団から感謝され至福の極みであった。「合縁奇縁」、人との巡り合わせは不思議な因縁によるもので、私は今年の夏、ラトビアと赤い糸で結ばれている感がした。

常例のボランティアで続けているラトビア支援の「クリスマス・チャリティ・コンサート」も近づいて来た。私は、益々健康に留意し合縁の糸を引き寄せ、私の第二の故郷、北九州の皆さんの力添えを得て、「チャリティ・コンサート」の盛会に向け努力すると共に、ラトビアへの支援の輪を広げ、日本・ラトビアとの「草の根国際交流」の継続を決意した。加えて、日本・ラトビア音楽協会や北海道の東川・ラトビア友好協会などと協力して、微力ではあるが、両国の国際交流に尽力する所存である。

追記：長居陸上競技場での開会式当日は、三次から40数名の応援団が貸切りバスで駆けつけ、ラトビア選手団の入場行進ではラトビア語の「頑張れ！ラトビア」の横断幕とラトビアの小旗を振って激励した。中国山地の小都市・三次とラトビアが真の友好の絆で結ばれて、益々国際交流が深まるよう心から祈念する。

全日本おかあさんコーラス全国大会「ひまわり賞」受賞

フラウリッヒ・ヴォカール（徳島）赤池　喜代

去る8月25日、26日の2日間、第30回全日本おかあさんコーラス全国大会（日本合唱連盟、朝日新聞主催・キューピー株式会社協賛）が鳥取市の県民文化会館で開かれました。私たちフラウリッヒ·ヴォカールは四国支部代表として出場し、優秀賞に当たる“ひまわり賞”をいただきました。

曲はラトビア民謡のメドレーで「DZIEDAT MEITAS VAKALĀ」（娘たちよ、夜に歌え）。セルガ·メンツェにより、デュオ、打楽器を織り交ぜて魅力的なものに編曲されています。おかあさんコーラスは合唱のコンクールの中でも「舞台」を競うもの、ハーモニーはもちろん、衣装や演出の効果、「おかあさんパワー」を発揮しないといけません。私たちは3度目の全国大会でこの曲にめぐり合う事ができ、本当に幸運でした。2000人収容の梨花ホールの大舞台で私たちは民族衣装に身を包み、娘たちのしるしの花冠をかぶり、ラトビアの娘たちを演じきったつもりです。こだわった民族衣装は手作りで、ラトビア風の生地のスカート、サッシュやベストも写真を見て研究、白いタイツや黒の靴まで…本物みたいとなかなかの評判でした。

私たちは昨年の夏から1年かけてこの曲を練習してきました。始めは呪文のようだったラトビア語も何となく耳慣れ、単語の意味もわかるようになってきました。曲の中にあふれるラトビアのフォークロアの世界を何とかして伝えようと勉強もしました。ラトビアの風土、生活、歴史、色々なことを調べました。夏至祭の夜の情景から娘の恋の物語、8分間の演奏が終わりに近づいた時、熱いものがこみ上げてきました。「もうこの曲を練習するのも終わりなんだわ…」と。きっと団員21名みんな同じ思いだったと思います。

楽譜の入手から、ラトビア語の指導までお世話になった黒沢歩さん、徳島を訪ねてくれたイレーナ、ヴィゴ夫妻と少女合唱団RESONOのメンバー、演技も踊りもできなかった私たちを励まし指導してくださった演出家の内藤順子先生、たくさんの方に助けていただきました。このステージがくれた交流の輪が私たちにとって何よりもうれしいものになりました。ひまわり賞はがんばった私たちへのご褒美だと思います。応援してくださった皆様に心より感謝いたします。ありがとうございました。

日本ラトビア音楽協会　役員

会　長
藤井　威　前 駐スウェーデン ラトビア大使

副 会 長
岡村　喬生　オペラ歌手

専務理事
加藤　晴生　平成ビジネスアソシエイツ 常務執行役員

常務理事
斎藤　哲　日本経済新聞社 社友 前ロシア東欧記者会会長
徳田　浩　柔道新聞編集長　元毎日新聞編集委員
黒澤　幸男　くらしき作陽大学音楽学部教授
遠藤　守正　税理士
堀　俊輔　指揮者
松原　千振　東京混声合唱団　常任指揮者

理　事
永田　宏　三井物産㈱
迫　秀一郎　サンルートプラザ東京総支配人
西脇　久夫　ボニージャックス　㈱ニュー西北エンタープライズ 代表取締役
長澤　護　指揮者　早稲田大学グリークラブOB会前会長
杉浦　保友　一橋大学教授
久元　祐子　ピアニスト
田摩　勇　NHKエンタープライズ
頴原信二郎　早稲田大学グリークラブOB会　広報担当

監　事
稲山　輝機　毎日新聞社　顧問

顧　問
伊東　一郎　早稲田大学教授　早稲田大学グリークラブ会長
神郡　克彦　長崎大学教授
小礒　明　日本ラトビア協会理事長
清水　信行　三井物産㈱　元常務
下田　博郎　慶応義塾大学ワグネルソサイエティ男声合唱団三田会会長
冨永　侃　早稲田大学校友会　兵庫県支部副支部長
西原　義弘　北海道東川ラトビア交流協会
風呂本惇子　城西国際大学教授
風呂本武敏　愛知学院大学教授
三ツ松　平　男声合唱団 グランフォニック　団長
村山喜一郎　日本エストニア友好協会東京支部　副支部長
山根　秀夫　神戸新聞社 会長
山本　徳行　（在北九州）スウェーデン名誉領事
レディー・マークス寿子　作家　秀明大学教授

◇

運営委員
加藤　晴生
遠藤　守正
関口　教和
中澤　亨
工藤悠一郎
頴原信二郎
金岡　隆
田摩　勇
中嶋　勝彦
松本　数馬
小俣　泰英
堀口　大樹

ラジンさんのシルバーウルフ、祖国ラトビアへ

川島泰彦　日本ボーイスカウト富士地区国際委員長・当会会員

前日ロンドンに着いた私達富士地区ボーイスカウト一行15名は、8月1日3時、ベーカー街近くの在英国ラトビア大使館を訪問した。ヴァイヴァルス大使の友人であるインダリス・ベルジンス英国大使が夫人とにこやかに出迎えてくれた。

吹き抜けのある明るい二階に案内されると、ちょうど郊外の世界ジャンボリー会場からラトビアのスカウター、31歳のスミッツさん他3名が駆けつけたところだった。明日、ジャンボリー会場でのウルフ章返還式前に面識を持たせたいという、大使の暖かい配慮によるものだった。

大使館の方々の心のこもった手料理と美味しいラトビアビールを味わいながら、大使夫妻、スミッツさんらと、明日手渡すウルフ章や戦前のスカウターの写真などを見ながら楽しく語り合った。ボーイスカウト支援国会議員会長・斉藤斗志二代議士、日本大使館の水島真美公使も仲間に加わり実に楽しい時間を過ごした。

翌朝、私達はバスでボーイスカウト運動100周年を祝い、世界150ヶ国から4万人の少年達が集う英国の誇りを懸けた第21回世界ジャンボリーに向った。会場に近づくと大テント都市が出現した。会場内では胸に様々な国旗を付けたスカウト達が親しく語り合い、イベントに参加している。そんな少年達を頼もしく思いながら、返還式が行われる日本派遣団本部に到着。日本は1500人の大派遣団をこのジャンボリーに送っている。

3時の返還式が近づくにつれ、私は大変緊張した。100周年の記念イベントの一つとしてウルフ章を返還するのだから当然だろうと自分に言い聞かせた。式では英国代表コックロフト・ジャンボリー大会長、スミッツさん、私、斉藤代議士の順に席についた。来賓はこの日も時間を割いて下さったベルジンス大使、日本の野上義二大使、国会議員の塩谷立、山口泰明、西村明宏各氏、英国連盟トワイン事務総長、日本連盟の役員他である。これだけの方が集うのは実に異例だ。私達の前には、日本、ラトビアのスカウトはもちろん、様々な少年達が集まっていた。

斉藤代議士の式典主旨説明の後、ウルフ章を託された者として私が世界を巡ったウルフの話をした。ラトビアのスカウター、ラジンさんが如何に祖国を愛したか。ソ連軍に抵抗した際、またアメリカ亡命後も身から離さず、章とともにあったこと。そして1968年、64歳のラジンさんが23歳の私に会い、共にスカウターであることで信じ合ったこと。彼が如何に卓越した人格者であったか。彼の死後、夫人から遺品として大切なウルフ章を託され、以来、富士の麓で30数年を過ごしてきたこと。1991年のラトビア独立とその後のスカウト運動再生を知り、ラジンさんの愛した祖国にウルフ章の返還を決意し、斉藤代議士やスカウト仲間の全面的協力によって本日の返還式を迎えた私の喜びを語った。最後に「祖国ラトビアはどんなに蹂躙されても必ず蘇る」と言ったラジンさんの言葉が現実となり、このウルフ章は74年に渡って世界を一周し、私の手からスミッツさんに世界スカウティング永遠の友情の証として手渡されますと結んだ。その後スミッツさん、英国代表コックロフトさんから友情を称える言葉を頂き、三者がウルフ章返還証書に署名して式を終えた。

夕方、大テントで開かれたジャパンデイのレセプションでもウルフ章返還式のことがコックロフトさんから世界150ヶ国の代表に紹介され、笑顔の温かい拍手で称えられた。私の心はラジンさんの魂が帰国するという喜びと、もうウルフに会えないという寂しさと半々であった。

コクネセのキャンプ会場でラトビアのリーダー達と中央の女性は川島夫人

そんな時、スミッツさんから予想外の申し出があった。「私はまだ一週間英国に滞在しテント生活を続けるが、貴重な章をテントに置く訳にいかない。貴方は明日ラトビアに行かれると聞いたが、ウルフ章を持ってラトビアのスカウト達に見せてほしい」と言う。私は喜んで申し出を受け、翌3日ロンドンを発ちウルフと共にリーガへ向った。

◇

空からのリーガは実に美しく、平らな緑の中に存在していた。空港には80歳のオールドスカウト、ビジュプスさんとラトビアのスカウター、エラートさんが出迎えてくれた。かつてシアトルで共にラジンさんの教えを受け、現在オーストラリアに住む親友、岡田氏が駆け参じ、再会出来たのはこの上ないし幸せであった。リバルホテル・ラトビアに着くと田中享様の後任、久保克彦大使が待っておられ恐縮した。

ウルフを無事返還　右はスミッツ・ラトビア派遣団長
8月2日　世界ジャンボリー会場

翌4日、斉藤代議士、大使館の西山氏、鈴木さん、ビジュプスさん、ビルダさん、岡田氏を加え、総勢21名で、リーガの西100キロにあるラトビア人心の故郷・コクネセにバスで出発。コウノトリの巣を数えながらの一時間だった。

ダワガバ川の小島にあるスカウト達150人が90周年キャンプを張り、その閉営式に参列するのである。快晴の中、歴史上初、日本のスカウターがラチビアのスカウト達を訪問する。

キャンプサイトで交流の後、式には日章旗を掲げて参加した。私は挨拶の中で、この快晴の空はラジンさんがウルフと共に帰国した証としてプレゼントしてくれたと述べ、整列したスカウト全員にウルフ章を見せたが、ウルフを見る少年達の目は実に美しかった。彼等には持参したTシャツ、竹とんぼなどを手渡しして一緒に楽しい時を過ごした。

スカウト達に別れを告げ一時間後、ウルフ章の終りの住家、スカウトミュージアムに着いた。住宅地の古い建物だったが、中は精一杯磨き上げられ、戦前のスカウト運動の記録、亡命先でのスカウト活動のことなどが収納され、見事に展示されていた。ラジンさんのようにスカウト運動に心血を注いだ人々の手作りミュージアムだった。

ウルフ章を女性館長に手渡した時、私の心に空洞が出来た。章と共に日章旗、私のステートメントを飾り、精一杯自分の気持を表現した。地球を74年間駆け巡ったウルフの旅は終った。ウルフはいつまでも世界友情の物語を語り続けることだろう。

リーガに戻ると休む間もなく日本大使館と斉藤代議士主催のレセプションが久保大使の進行で開かれた。キャンプを終えたばかりのスカウトリーダー16名も招かれ、

シルバーウルフ返還証書

再度友情確認するチャンスに恵まれ、友情プログラムの合意書にサイン交換することも出来た。昨年、ラジンさん足跡調査に全力で協力して下さったコクネセ財団のボトルスさんにもお会いしお礼を申し上げた。彼も非常に立派な方とお見受けした。

◇

8月1日から4日間、多忙なスケジュールだったが、誠に実り多い日々であった。ウルフ章返還に当たり、全ての人々が気持よく、心から協力して下さった。これもウルフ章とラジンさんの強い愛国の情によるものと思わずにいられない。

翌5日はビジュプスさんの案内でリーガの魅力溢れるオールドタウンや野外博物館などを見学。全て予想した通りの美しさだった。ラジンさんがこよなく愛したこの地だから素晴らしくて当然だと思う。食事も日本の味付けに実によく似ていて美味だった。

6日は最後の公式行事、外務省へパブリクス外相訪問だ。6月に東京でお会いしたので、終始、和やかな雰囲気で、大臣のジョークに一同大笑いした。プレゼントを手渡し、英国でのウルフ返還式調印書を見せて式の報告をすると、大臣は「益々友情が深まりますね」と大変喜ばれた。

リーガを発つ朝、ビジュプスさんが見送りに見えた。彼の優しさ、愛国心、深い人間性は、私が尊敬してやまなかったラジンさんと重なった。こんなに魅力ある人々のいるラトビアとは、私の生ある限り、交流が続くに違いない。そんな思いの私を乗せ、機は一面の緑の上を離れていった。

翁長沖縄名誉領事：第2回ラトビア空手ミッション訪問記

神人武館師範　新嘉喜俊一

8月25日より30日の間、空手神人武館会長である在沖縄ラトビア名誉領事翁長良光と翁長美智子館長および新嘉喜俊一師範の3名は、パブリクス外務大臣の招聘に応じ、ラトビアで第2回空手ミッションを実施するため、リガを訪問しました。

8月24日那覇を出発、関空一泊の後、フィンランド航空でヨーロッパへ最短距離を一飛びしわずか12時間でヘルシンキに到着、同地経由25日リガ上空に到着しました。機上から見下すリガには山影が一切なく、空港に降り立っても四囲は白樺の林の地平線だけが広がり、山や海を見なれた日本人には見慣れない景色で驚かされました。一行の空港での第一印象はただ一言、「寒い！　それにしても寒い！　こんな風景は沖縄では見たことがない！」というものでした。空港ターミナルでは、パブリクス外務大臣、外務大臣の親友エドガーズ師範、今回の指導に参加するためアメリカから飛来したニューヨーク支部長のジミー・モラ師範、そのフランス人弟子ジャンマリー師範を面々とする大歓迎団が出迎えに来てくれていました。見知らぬ異国は心細いものですが、空港で親しい人々の笑顔に出会い、一転して慣れ親しんだ土地にいるような明るい気持ちになりました。

我々のホテルはバルト海に面したヴィラ・アンナ・ホテル。夏だというのに外は昼間でも20℃を割っていて、夜は沖縄の真冬なみ！　寒さには最後まで閉口しました。

翌26日から稽古が始まりました。3人でホテルで朝食をすますと、すぐに外務大臣がエドガーズ師範と迎えに来てくれました。朝稽古はパブリクス外務大臣の自宅の道場で稽古という予定でしたが、悪天候のため道場をもっているエリクス師範の道場に変更になりました。天気が悪いと外務大臣の道場は稽古が出来ないのです。それは青天井で屋根が無いからです。壁もありません。ただ庭に床が敷かれているだけです。海辺の庭に生えている防風林の大きな松の樹から「さぎマチワラ」（突き板）が下がっているだけです。本来空手では床も無くてもいいのです。そんな訳で後日このマチワラだけが立っている床も無い庭で稽古をすることになりました。外務大臣夫妻の小さな男の子と女の子二人が会長がプレゼントした小さな空手着に着かえて出てきましたので、美智子館長が大喜びで、親しく手をとり足をとるようにして指導しました。その様子を外務大臣夫妻が目を細めて喜んでいる姿があり、私達はこの子供たちが成長してきっと日本贔屓になってくれるのではないかと、期待に胸を膨らませました。

エリクス師範の道場に着くと、男女30名近くの人々が迎えてくれました。その中には中学生くらいの若い男女10名もいました。皆さんエリクス師範と一緒に稽古をしている様子で、稽古が始まると翁長会長の一言一言、美智子館長の一挙手一投足を食い入るように注目し、吸収できるものはすべて吸収してやろうとの意気込みが伝わってきました。

長い一日の稽古とそれに続く厳しい夜稽古の後、パブリクス外務大臣の自宅に親しく招待され、バーベキュー・パーテイーで心からもてなしてくれました。夏休みで帰国していたヴァイヴァルス駐日大使も参加し楽しい時間となりました。大臣の自宅は、バルト海随一の瀟洒な避暑地として知られるリガ郊外ユールマラの海辺にあります。そこで素晴らしい夜のバルト海の浜辺を散歩しようということとなり、みなで連れ立って波際にゆきました。リガは樺太に位置する高緯度のため、太陽の沈まない白夜というものを初めて体験しました。天辺には皓々とした白い月が高くかかり、バルト海の水平線には赤い大きな太陽が一日中低く沈まず、月と太陽が天空に一緒にかかっているのです。ヨーロッパの北端といわれるバルト海の浜辺でこのような幻想的な美しさを見たことには感激しました。

次世代を担う子供たちにも指導

3日目27日も翁長会長、美智子館長、そして私も加え、大臣はじめ皆一緒に稽古を続けました。朝はエリクス師範の道場に行き、子供達も参加しました。ラトビアの次世代を担う子供たちを指導できたのは本当に充実感のあることでした。夕方には再びパブリクス外務大臣邸の芝生の道場で稽古となりました。そこはデコボコあり、傾斜あり、果てまた芝に足を取られたりで、道場の床の上とは全く勝手が違うコンデションです。かって沖縄でもこのような場所で稽古したと言われていることを思い出し良い経験となりました。

激しい稽古が早朝から夜まで続いた

道衣姿のパブリクス外務大臣

4日目28日も朝はエリクス師範の道場、夕方はまたまた芝生道場での稽古が続きました。芝生での稽古では、翁長会長はじめ3名が全く予想もしなかったつらい厳しい経験がありました。それは巨大な藪蚊の大群の来襲です。ラトビアでは人も巨人ですが、蚊もトンボの子供ではないかと思うほど大きいのです。蚊取線香をたいているのですが、つむじ風のような蚊立ちの真っ黒な大群の猛攻ですから太刀打ちできません。地獄の責め苦でしたが、会長、館長、生徒も頭や全身をでこぼこにしながら歯を食いしばっての難行苦行となりました。

第5日目の29日には、エドガーズ師範がリガの市内を案内してくれました。世界遺産として知られるリガの旧市街は、さすがこれまでリガが数百年にわたってバルト海随一のハンザ貿易都市の一つとして殷賑を極めたといわれるだけあって、ありし日の富貴のかげをとどめており、壮麗なレンガ造りの建物やゆかしい石畳の狭い通りも面白く、歴史や伝説に満ちていました。

市内観光から帰ると再びマチワラ作りが始まりました。皆で穴をほってはマチワラを立てましたが、普通マチワラは道場にあるものですので「地面にたてられたこんな立派なマチワラは世界でもここだけだろう」と笑い合いました。

その晩、最終日前日となるため、再びパブリクス外務大臣邸に招かれサヨナラ・パーティーをしてもらいました。気さくで料理上手な外務大臣夫人の手作り料理に舌鼓をうち、酒が入ると自然に両国の歌合戦が始まり、深更まで名残尽きせぬ楽しい宴となりました。

出発の30日、すべての指導日程を成功裡に終え帰路に着くこととなりました。空港にはわざわざ外務大臣、モラ師範、少し遅れてフランスへ帰る予定のジャンマリー師範などが大勢送ってくれました。

今回のラトビア空手ミッションは、厳しい稽古もさることながら、巨大な蚊の大群に襲われたり、沈まぬ白夜の太陽を見たり、サプライズとハプニングの連続でした。ラトビアという未知の国との出会いの中で、とくに外務大臣の個人的なイニシアチブによる招聘プログラムであることもあり、受け入れ体制は何から何まで破格でした。大臣の貢献により日本ラトビア・スポーツ交流促進という観点からは歴史的な道標となる大きな成果を挙げたことは特筆すべきことであったと思います。翁長会長と美智子館長はこれで2回目のラトビア訪問で余裕を示していましたが、新たなラトビアの魅力を発見したようです。私は初めてのラトビア訪問であり、ラトビアとはなにかということについて一気に視野が広がりました。特に大の親日家の外務大臣夫妻には、まさに一期一会の精神があり、卓越した人格と限りない暖かさ、心配りには、会長、館長、私それぞれが改めて心酔しました。また今回空手ミッションを受け入れてくれたラトビア人の皆さんは静かでやさしい心根の人々ばかりであり、その人柄と国民性に触れて認識を深めました。

私どもとしては改めて空手を通じてラトビアひいてはヨーロッパと日本との友好を長期的に構築していくことが崇高な使命ではないかとの想いを抱きつつ帰国しました。

ラトビア民族とその民謡

吉田ラスマ

愛娘・陽香（はるか）ちゃんと

遥か昔、ラトビアの国家成立よりも、ラトビア語の最初の小説よりも、ラトビア人の最初の知識階級や芸術家、作曲家よりも以前、ラトビアの農民の生涯を貫いていたのは民謡であった。19世紀の中頃、大学教育を受けたラトビア人達は、それまで評価されてこなかったこの豊かさに特別の関心を向けた。そして、可能な限りの民謡を歌い手から聞き取り、それをリーガに送るよう呼びかけた。民謡を忘却から守り抜き、ラトビア人にも古くからの豊かな口頭伝承の伝統があることを他の民族に知らしめるため、送られてきた資料を出版することになった。

様々な地方から送られてきた資料はK.バロンスの手に委ねられ、彼は互いに結びつきのない21万7996ものテキストを整理する方法を模索し、出版にむけた準備を行う。専攻が宇宙学であった彼は、4行詩のテキストすべてを輝く星のように扱い、民謡という宇宙の中にそれぞれのふさわしい場所を見つけた。

ラトビアの民謡は、農民の年中行事や家庭の風習と切っても切り離せない。歌が歌われていた背景を知っていて初めて、完全に民謡の中身を味わうことができるのである。K. バロンスはこのことを考慮に入れ、人間が生まれてから死ぬまでのいくつもの家庭行事、年中行事（出産、結婚式、葬式、クリスマス、夏至祭など）に沿って、すべてのテキストをまとめあげた。ラトビアの多神であるサウレ（太陽の神）、メーネシス（月の神）、ディエウス（神）、ライマ（幸運の神）、マーラ（豊饒の神）が歌われている、いわゆる神話的な歌は個別にまとめられている。

出版に向けた原稿の執筆中には、とても類似した歌が異なるラトビアの地方で集められたことがわかり、それはこれらの歌が広く普及していること、そしてある特定の歌い手ではなく、民族全体に共通していることを意味している。K. バロンスは、収集されたテキストのすべてを後世に残したかったが、何千もの似た歌を出版することはできなかった。そこで彼は、集められたすべてのテキストから基本的なテキストを選び、残りのテキストをその変種として分類した。基本的なテキストとその変種には番号が当てられ、ラトビアのどの地方でその歌が採取され、誰がそれを送ってきたのかがわかるようになっていた。K. バロンスは民謡の分類の問題にも関わった。歌にはメロディーはあったものの、それぞれは個別に編纂・出版がなされた。K. バロンスは収集したコレクションを「ラトビアのダイナス」と名付け、民族の詩歌の手本とした。全8冊からなる6巻本のラトビアのダイナスは1894年から1927年の間に出版され、それと平行してアンドレイス・ユルヤーンスは1894年から1927年の間に全6巻からなる民謡の楽譜を編纂・出版した。

民謡の編纂により、ラトビア人の民族意識の形成が促され、それが1918年のラトビア共和国独立へとつながることになった。「ラトビアのダイナス」の出版は、ラトビア人にも古い神話的な詩歌の伝統があることを世界の民族に知らしめることとなった。ラトビアの民謡はラトビア人の民族文化の礎石であり、文章ラトビア語の基礎であり、芸術や音楽、文学における新しい創造にとって尽きることのない源である。

ラトビアの民謡の採集は20世紀になっても続き、現在ラトビア民俗アーカイブには120万もの民謡がある。これは世界で暮らすラトビア人1人に対して、1つの民謡があることになるといえるだろう。

吉田ラスマさん

1969年生まれ。89年から94年までラトビア大学歴史・哲学部で歴史を学ぶ。94年修士号取得。論文のテーマは「ラトビアの民謡における花咲く木」。05年から1年間、奨学金を得て中央ヨーロッパ大学ブダペストキャンパスで学ぶ。中世史の修士号取得。95年から2000年までラトビア外務省勤務。この間、若手外交官向けの日本基金で1年間、北浦和の日本語国際センターで日本語を学ぶ。この時、読売新聞記者・吉田さんと知り合い、00年に外務省勤務を終えて結婚、日本に移り住む。05年、陽香（はるか）ちゃん出産。新座市在住。

ライモンズ・パウルス氏とコーヒータイム

小田陽子（歌手・当協会会員）

「ナーカマー・ピエトロ！」

声楽家のような男声のフレーズが今も耳に残る。リガ市内を走るトリムの車内放送だ。意味は「次の駅は…」

7日間のラトビア滞在中、一日の始まりはこのフレーズからだった。

たっぷり水を湛えた緑の中にたたずむホテルから世界遺産認定の旧市街までは、この可愛らしい路面電車で15分ほど。そこは絵本の中に足を踏み入れたような中世のお伽の国だった。

この地こそが私が長年歌ってきた「百万本のバラ」の原点だ。ついにここまで来てしまったと、万感の思いをこめて胸いっぱい空気を吸い込んだ。

「百万本のバラ」は日本では当初シャンソンと思われていた。良くてロシア製という認識に過ぎない。いったい源流はどうだったのか、ラトビア人のこの曲への思いはどんなものかを含めて、何か感得できればと昨年9月にこの国を訪ねてみた。

「百万本のバラ」はロシアでリメークされたもので、そもそもラトビアでは「マーラが与えた人生」という原題で1981年にヒットし、東欧諸国にその波紋は広がっていた。人生哲学を含んだこの原曲はいまだに国民的な流行歌である。

滞在4日目にこのヒット曲の作曲家ライモンズ・パウルス氏との面会がかなった。東欧諸国の音楽の巨匠であり、独立当時は文化大臣、現在は大統領顧問であるから緊張もひとしお。国会の会期中とかでその合間を利用しての面会。実に多忙な人だ。

国営のラジオ・ラトビアの喫茶室にその人はやってきた。大きな体をやや揺らせてせっかちに歩く。表情は厳しい。しかしこれは生まれつきらしく、笑っても大差なかった。

「マーラが与えた人生」のことについて聞き始めると、よほどそればかり聞かれると見えて「またか」と両手の平を見せていたずらっぽく笑った。

パウルス氏と記念撮影「ラトビア旅行の収穫は思いがけない大豊作に…」

「これまでに千曲以上の曲を書いている。そのうちの一曲に過ぎないのだよ」と、ややご不満のようだ。ピアニスト、アレンジャー、ミュージカルのコンポーザーなどなど、その音楽活動は多岐にわたり、ジャンルもカントリーからクラシックまで実に幅広い。ご自分は何が本流かとたずねた。

「本来クラシックだがジャズが好きだ。ジャズの音楽理論は大変優れているのでよく参考にする。しかし音楽にジャンルはない。みんなに愛される作品がNo.1だよ」

「マーラが与えた人生」がロシアでヒットしたことについて伺うと。

「ある日ロシアの歌手アラ・プガチョワがやってきて、ぜひ歌わせて欲しいと頼まれたので、どうぞと言ったまで。結果、形は変わったけれど大ヒットしたことは大変喜ばしいことだね。」となんとも屈託が無い。ヒットの秘訣は「“マーラが与えた人生”が象徴するようにシンプルなことだよ。ポピュラーになるにはシンプルでないとね。」と片目をつぶった。

ちょっと気難しい外見とは裏腹に大変気さくな性格でいらっしゃる。子供の音楽教育にも熱心で何百曲も子供のために提供している。まさしく鬼面仏心の魅力的な作家だった。

最後に「大編成のコーラスのCDを今度出すんだ。プレゼントしよう」と言ってくださり、ちゃっかりサインもいただいた。

旅の収穫は思いがけず大豊作になった。

新入会員ご紹介（敬称略）

荒井秀子　日本エストニア友好協会
宗吉敏彦　㈱クリード代表取締役
白石仁章　外務省 外交資料館

（総計166名）

※他に若干名の方が入会の意志表示をされていますが、9月末現在まだ未手続きです。

会員数増が当面の課題

当協会は創立3周年を迎え、早くも5周年記念「ラトビア音楽祭」が始動しました。目下の課題は会員数増で、会長・専務理事とも300名という目標を掲げています。友人・知人の方々に入会をお薦めいただくようお願い申し上げます。

毎回在日ラトビア人と素敵な交流

ラトビア語教室報告

植木佐代
（ラトビア語教室事務局）

左から植木さん、堀口氏、大使館のオルロフ氏

協会の新しいプロジェクトである「ラトビア語教室」について、教室開設までの経過と開講日の様子は、前号の本文記事と「琥珀」で大変詳しく紹介して戴きました。また、先日の協会創立3周年記念レセプションは、講師の堀口氏も事務局の私もあいにく先約があって伺えなかったのですが、受講生のお一人小川翠様からご報告のスピーチがあって、会員の皆様には教室の雰囲気を感じ取って戴けたことと思います。

教室は、6月27日の第1回に定員12名でスタートしました。その後、大使館や受講生の紹介で、2名の方から受講のお申し込みがあり、補助椅子を使えば何とか可能とのことでお受けし、現在は14名で、これまでに6回行なわれています。

授業は堀口講師の手作り教材に加え、ラトビア共和国大使館がご用意くださった教科書とワークブックを使用して進められています。第1回は、まず挨拶と自己紹介の仕方から始まりました。何分、隔週で月2回のため、進度がやや速いかなとの印象はありますが、受講生は、テープを持ち込んで授業内容を録音したり、ノート整理を工夫して復習に役立てたりと、堀口講師の熱意に応えています。

そして、特筆すべきは、一般の語学教室では決して経験できない贅沢な企画がある事です。それは、第1回のヴァイヴァルス大使を始め、毎回大使館がアレンジして下さるゲストの方との交流です。第2回は、東京外国語大学で1年間日本語を学び、現在は埼玉大学で物理学を専攻しているペーテリス君（故郷ヴェントスピルスの紹介）、第3回はパレックス銀行日本駐在員事務所長ジャネッタ・スードニエツェ女史（音楽テープを聴きながら故郷ラトガレの紹介）、第4回は埼玉県在住の吉田ラスマさん（ラトビアの民謡ついて）、第5回は大使館員のエギリス・ゼルメ氏（ラトビアの料理について）、第6回は大使のご令息でインターナショナルスクール学生16歳のヤーニス君（若者の暮らしぶりやご自身の日常生活）と、多彩なゲストから直接お話が伺えるのは、大変興味深い事です。また、8月22日には、教室終了後、暑気払いを兼ね、堀口講師を囲んで懇親会を催し、受講生の親睦を図りました。

毎回、宿題やそれを確かめる豆テストがあって、事務局をお引き受けしたご縁で受講している私は、もはや落ちこぼれ状態ですが、来夏の合唱祭にラトビア訪問を予定されているなど、それぞれに学習への動機づけが確かで、皆さん大変熱心に取り組んでいらっしゃいます。毎回ゲストとかわす自己紹介も、最初は名前だけでしたが、会を追うごとに、住まいの場所や職業なども言えるように教えて戴きました。

最後になりますが、このように順調に滑り出す事ができましたのも、ひとえに、会場のご提供をはじめ、大使館の全面的なご理解ご支援の賜物であり、改めて心からお礼申し上げます。最近、新たに受講のお問い合わせもあり、いずれ第2期をスタートする時期が来るものと思っています。

女心とバルトの空

白石仁章
（外務省大臣官房外交資料館）

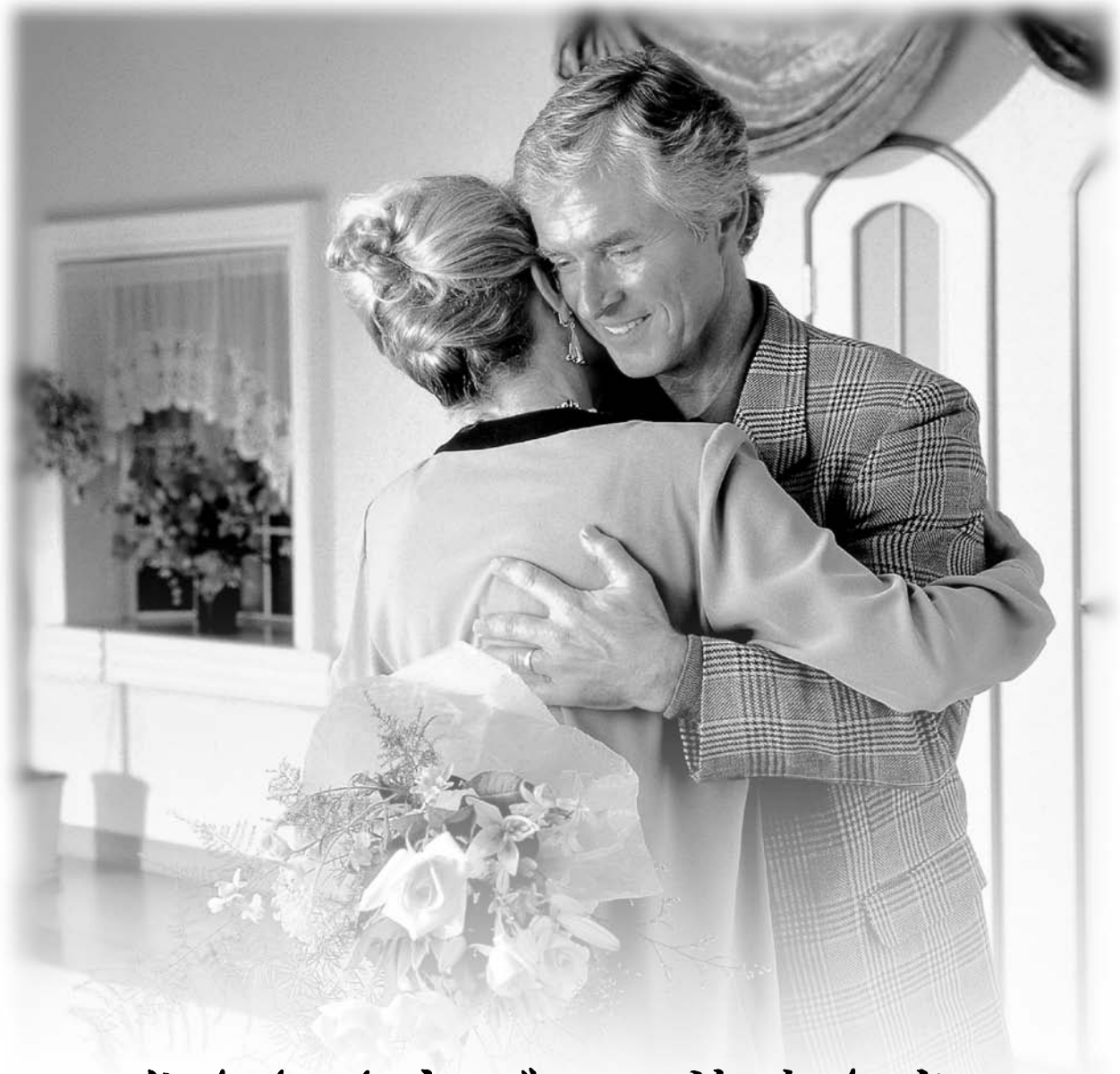
ラトヴィアの首都リーガの街を歩いていると、この国が日本から距離的には離れているにもかかわらず、思わぬ日本との共通点を見つけることがある。今回は、リーガの街を初めて歩いていた時に思いがけなく見つけたというか経験した共通点について書いてみたい。

それは、2002年9月の中頃、今思えば当時の日本は日朝首脳会談のニュースで騒然としていた時期だが、そんなことも露知らず、初めて見るリーガの街並みの美しさに感嘆し、わくわくしながら、まずはガイドブックの助言に素直に従って、聖ペーター教会を訪れ、その高さ約70メートルの展望台からリーガの街並みを眺めてみようと思った。展望台にはエレベーターで行くことが出来、約20分に一度往復していた。新しいグループを乗せて昇ってゆき、前のグループを乗せて降りていくわけだが、展望台に到着し、眼の前に展開する光景の美しさは、本協会会員の皆様には藤井会長ご自身の撮影による今年のカレンダー1、2月時の素晴らしい写真でおなじみだと思うので、ここでは賛言を省くが、同じエレベーターで昇った二組の（アメリカ人と思われる）中年の御夫婦も盛んに“Beautiful!”“Wonderful!”などと感嘆していた。

しかし、教会に入った時点では素晴らしい青空であったにもかかわらず、展望台にいたわずか20分程の間にまさに“一転にわかにかき曇り”、急に強い雨が降り出したのだ。ついさっきまではしゃいでいた御夫婦達など、奥様方が旦那さんにしがみついてブルブル震え出す程であった。当初は、この絶景をゆっくり味わうためになるべくならエレベーターの迎えが遅い方が良いなと思っていたが、そんな余裕はなくなり、一刻も早く迎えに来て欲しいと思っていると、雨が降り始めて10分程してようやくエレベーターが来たときには正直ほっとしたものだ。エレベーターからは我々と交代で数名の男女が出て来たが、彼らに向かいそれまで豪雨に耐えていた男性の一人は「我々は、最初の半分ぐらいは雨が降っていなかったので景色を楽しめたけれど、あなた達は気の毒だね」とからかっていた。確かにこの豪雨の中ではせっかくの景色も台無しだなと思って彼らに同情を感じつつ、ともかく助かったと思い、嬉々としてエレベーターに乗った。ところが、地上階に降り、5、6分程教会の中をもう一度見学し、外に出ると驚いたことに既に雨はあがっていた。だが、この出来事は第一弾に過ぎなかった。リーガ滞在の僅か数日の間に何度も急な雨に遭遇しながら、突然やむことを経験し、そのあまりの気まぐれな変化にただただ驚いた。

古来日本では、「女心と秋の空」というが、これはラトヴィアでも同じであることをとことん思い知らされた日々であった。皆様もこの季節にラトヴィアに行かれる際には、是非雨具のご用意をお忘れないようにと思う次第です。

情報断片



私たちは人びとの健康を高め

心豊かな社会づくりに貢献します

TAIHO 大鵬薬品

http://www.taiho.co.jp/

抗がん剤の研究・開発に取り組んで40年 これからもがん領域のリーディングカンパニーとして歩み続けます